

## (論文内容の要旨)

巨大なデルタに位置するバングラデシュにおいて、屋敷地は人々に雨季にも湛水しない空間、通年の植物や家畜の生産を可能とする空間を提供する。零細、土地なし農民の比率が高い同国において、屋敷地の生産地としての重要性が農村開発などの現場からも注目されてきた。屋敷地での植物栽培は、人々の日常的な必要性に合わせた植物の多様性の高さが注目されてきたが、市場経済の浸透により商品作物の導入が急速に進んでいるとも言われている。本論文は、以上のような背景にもとづき、水文環境の異なるバングラデシュの2村を事例に、屋敷地の構造と機能について、特に屋敷地における住民の植物の利用と管理に注目して、その経年的な変化を解析し、とりまとめたものであり、3部、11章からなっている。

「第一部 本研究の目的と方法」では、研究の視点、調査地の概要及び調査方法を記述している。第1章は緒言であり、この研究の背景を明示するとともに、本論文の構成について記述している。第2章では、調査地として選定した、雨季にも湛水しない比較的高地に位置するマイメンシン県カジシムラ村(以下、K村)及び、氾濫原に位置し雨季には1~3メートルの湛水を見るタンガイル県ドッキンチャムリア村(以下、D村)について、K村は屋敷地の平均面積の広大さが、D村は平均所有土地面積の零細さが際だつことなど、調査地域の概要を記述している。第3章では、調査の方法を示している。

「第二部 屋敷地の構造と利用の形態」では1990年前後に行った研究の成果を述べている。第4章は、1988-90年における、屋敷地の形成条件に恵まれたK村の屋敷地の構造と植生について述べることにより、バングラデシュにおける一つの典型的な屋敷地のありかたについて検討し、屋敷地内の中庭、叢林、池及び池周りなどの利用空間において、各生育場所の特質に合わせて植物が配置されており、また屋敷地の植物が日々の食材源として、また収入源として役立っていることを明らかにした。第5章から第7章は、屋敷地確保のためには高い土盛りを必要とするD村での1992-95年の研究の成果を述べている。第5章では、参加型農村開発研究協力プロジェクトを分析することにより、屋敷地では、植物資源の確保や管理の形が、市場原理とは異なる、村での暮らしの原理が優先していることを明らかにした。第6章では、屋敷地内の植物の利用について詳細に分析し、在来の植物に顕著な、植物の経済性とは関わりのない利用用途の多様性、植物の各部位を最大限生かすための利用の体系を明らかにした。第7章では、屋敷地の植物管理に注目し、雨季の湛水という水文条件及び屋敷地の狭小さを考慮した多

層にわたる空間の利用、季節的な土地利用の変化、高密度な植物管理がなされていること、その前提として、各植物の生育特性への深い理解が存在していることを明らかにした。さらに、植物資源の確保には、婚姻や地縁等、社会ネットワークが重要な役割を果たしており、特に、地縁ネットワークは、貧困な世帯にとって、村に普遍的に存在する資源の確保に役立っていること、また、植物の管理、資源の確保において、女性の果たす役割が大きいことも明らかにした。

続く「第三部 屋敷地とその利用の変化」では、2004-08年に行った調査の結果を第二章の結果と比較することにより分析を行っている。両村共に、世帯数が増加し、世帯あたりの平均屋敷地面積は減少していることを述べた後、第8章では、K村の屋敷地の植生とその利用の変化に注目し、屋敷地の生活空間としての重要性の増加、住民男女の高い栽植意欲、日常の食生活における屋敷地生産物の重要性の維持を明らかにした。第9章では、D村の植生の変化とその要因に注目し、野生種において種数、個体数共に大きく減少が見られること、それには栽植空間の減少に加え、営農体系の変化が大きく影響していることを明らかにした。第10章では、同じくD村において、男性の換金を目的とした植物の栽植意欲が減少した一方で、女性の自給を目的とした利用や植物の管理や資源の確保の形、地縁などの社会ネットワークは維持されていることを明らかにした。

第11章は、本研究の成果のまとめと結論に当てられている。

氏名

吉野馨子

(論文審査の結果の要旨)

屋敷地は、熱帯、亜熱帯アジアにおいて、重要な生産の場であり、またバングラデシュ農村においては、雨季に湛水しない貴重な土地を提供する。屋敷地やホームガーデンの生産様式に関する研究は幅広く進められてきたが、その一方で、屋敷地を利用する住民の在来技術や知識、屋敷地の持つ社会的な役割に関する研究例はほとんどなく、これらを解明することは、熱帯農業生態学及び民族植物学、農村社会学上重要である。

本論文は、バングラデシュ農村の屋敷地の役割について、屋敷地の構造、屋敷地における植物の利用と管理を経年的に解析した研究成果をとりまとめたもので、評価できる点は以下のとおりである。

1. 屋敷地の植物の一つ一つに注目し、村の人々の保有する在来知識を詳細に分析、検証することにより、生活に必要な資源の持続的な確保をめざすという論理を基に、非常に多様性の高い屋敷地の植物の利用及び管理の体系が実現されてきたことを明らかにした。また、植物の利用と管理に関する知識や技術が、デルタという水文環境及び各植物の生育特性への深い理解に裏打ちされたものであることを明らかにした。
2. 屋敷地の植物資源の利用や入手に注目することにより、屋敷地の植物資源が、親戚や地縁関係のネットワークにより更新され、またその利用においては、親戚や隣近所との関係を強める役割を果たしているなど、屋敷地資源がもつ社会的な機能について明らかにした。
3. 屋敷地の管理や利用において女性が果たす役割を、屋敷地のもつサブシステム的な特質に注目しつつ分析し、明らかにした。
4. 屋敷地の利用の実態を、経年的に現地調査を繰り返すことにより、バングラデシュ農村の屋敷地が、市場経済が浸透していながらも、必ずしも市場化の方向には向かっておらず、むしろ、自給的な性格をより強めていること、そして屋敷地の資源の利用や管理においては、女性が重要な役割を果たし続けていることを明らかにした。さらに、屋敷地の利用の変化が、他の生産地、村全体の営農体系の変化とも大きく関わりあっていることを明らかにした。

以上のように、本論文は、長期に渡って現地調査を繰り返すことにより、熱帯地域のホームガーデンの一形態である、屋敷地のもつ植物生産及び社会的な役割とその変容について説明することに成功しており、熱帯農業生態学、民族植物学、農村社会学、農村開発学の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成21年6月23日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。